巻頭言

適切な社交による契約社会から信用社会への移行が安全と健康をもたらす

▼総合地球環境学研究所 所長　山極 壽一（やまぎわ・じゅいち）

京都大学理学部卒、同大学院理学研究科博士課程退学、理学博士。（財）日本モンキーセンターリサーチフェロウ、京都大学における霊長類研究所助手、理学研究科教授、理学部長、理学研究科長などを経て、2020年9月まで京都大学総長を務める。2021年4月より現職。日本霊長類学会会長、国際霊長類学会会長、国立大学協会会長、日本学術会議会長、内閣府総合科学技術・イノベーション会議議員、環境省中央環境審議会委員などを歴任。霊長類の研究を通して、人類に特有な社会特徴の由来を探っている。著書多数。

私たちは今、情報革命による恩恵と弊害に直面しています。インターネットやスマホを使っていつでもどこでも必要な情報を手にすることができる技術は、私たちの暮らしに大きな利便性をもたらしました。しかし、SNSによって誰でも情報を発信できるようになって、フェイクニュースや悪意に満ちた情報が発信され、人々を疑心暗鬼と混乱に陥れています。一度手にした科学技術はなかなか捨てることができないけれど、その恩恵を受けるだけでなく、負の側面もきちんと理解しながら賢く使っていくことが求められています。そのためには、私たち人間とはどういった生き物なのか、どういった社会が私たちに安全と健康をもたらすのかを検討する必要があります。

人類は共感力によって弱みを強みに変えた社会的動物

人類はアフリカの類人猿（ゴリラとチンパンジー）に最も近縁です。類人猿の祖先は、2000万年ぐらい前にはアフリカの熱帯雨林で大きな勢力を持ち、種の数も多かったのですが、台頭してきたサルたちに圧倒されて数を減らしました。その理由は、消化能力と繁殖能力がサルより劣っていたからです。熱帯雨林の植物は常緑の葉を植物繊維で固め、未熟な果実をタンニンやアルカロイドなどの化学物質で防御しています。サルたちは胃腸に大量のバクテリアを共生させていて植物繊維や化学物質を分解させますが、類人猿はバクテリアの量や種類が少ないのでなかなか消化できません。このため、多様な種類の葉を少しずつ食べ、完熟した果実だけを摂取しなければならず、未熟な果実も食べられるサルたちに先取りされてしまいます。また、類人猿はサルよりも授乳期間が長く、その間は妊娠ができないので、子どもをすぐには増やせません。1年おきに子どもを産めるサルたちのほうが、どんどん個体数を増やして勢力を拡張できたのです。

類人猿の中で人間の祖先だけが熱帯雨林を離れたのは、サルたちに追い詰められて生息場所を新たに求める必要に迫られたからでしょう。しかし、熱帯雨林の外には樹木の少ない草原が広がっていて、食物は分散し、地上には大型の肉食獣が闊歩していました。そこで生き抜くことができたのは、長い距離を歩くのにエネルギー効率がいい直立二足歩行という独特な歩行様式でした。人類の祖先は、自由になった手で栄養価の高い食物を運び、安全な場所で仲間と一緒に食べました。この食事という行為によって、人類は「見えない物を欲望する」「仲間を信頼する」という独特な社会性を身につけたのです。遠くに行った仲間が食物を運んできてくれるという期待、そういった期待を抱いて待っている仲間がいるという思い、そして、その食物を疑いを抱かずに食べるという行為です。この社会性は現在でも生きていて、それが人間の安心につながっています。だからこそ、食物に毒や針を入れたりす

る行為は、人々の安心を根底から覆すとんでもない犯罪なのです。

もう一つ、人類の祖先が講じたのは、子どもをたくさんつくるという方策でした。肉食獣の餌食になる動物は一般に多産で、それには一度にたくさんの子どもを産む方法と、一産一子で何度も生む方法があります。人類はサルや類人猿の仲間で一産一子なので、後者を選びました。それには、授乳を早く切り上げる必要があります。しかし、子どもの成長を早めなかったので、離乳時期を前倒しにして親の手のかかる幼児をたくさん持つことになりました。この成長に時間のかかる傾向は、200万年前に脳容量が増大し始めてからいっそう顕著になりました。脳の成長を優先させてエネルギーを回したために、身体の成長がさらに遅れることになったのです。その結果、人類は頭でっかちの成長の遅い子どもをたくさん抱え、親だけでは育てられなくなり、複数の家族が集まって共同保育をするようになりました。この家族と共同体とを両立させたことが、人類に新たな社会性を生み出しました。人間に近いゴリラは家族的な集団だけ、チンパンジーは家族がなく共同体的な集団しかつくれません。その理由は、この二つの編成原理が違うからです。家族は見返りを求めずに奉仕し合いますが、共同体は見返りが必要な互酬性を基本にしていて、ときとして相反することがあるのです。人類がこの二つを両立させることができたのは、相手の立場に立って自分が犠牲を払うことを厭わないという社会性が生まれたからです。将来自分も同じ立場に立つかもしれないという気持ちも働いたのでしょう。

共同の食事と共同の保育によって人類は共感力を高め、社会力を強化しました。それが、自己犠牲を厭わずに集団に奉仕したいという人類独特の社会性です。そして、その精神は美徳や道徳として今も現代社会にしっかりと息づいています。私たちがいくつもの集団をわたり歩いて暮らせるのは、顔見知りの知人でなくても集団のために尽くす心を持っていると見なされるからですし、その行為を認めてもらいたいと誰もが思うからでしょう。

社会関係資本と契約社会

前述したように、人類の脳が大きくなり始めたのは今から200万年前で、現代人並みの大きさになったのは40万年前と言われています。この間、まだ人類は今のような言葉をしゃべっていなかったとされています。では、どのような理由で脳がゴリラの3倍にも大きくなったのでしょうか。それに関しては、集団の規模が大きくなるにつれて、たくさんの仲間との社会関係を記憶して適切に用いる必要が生じたからだという「社会脳仮説」があります。その説によると、現代人の1400～1600ccの脳に匹敵するのは150人ぐらいの集団規模だとされます。面白いことに、現代でも食料生産をせずに自然の恵みだけに頼って暮らしている狩猟採集民は、平均して150人の集団で暮らしていると言われています。すると、今から7万～10万年前に言葉が登場しても集団規模は変化しなかったことになります。さらに、1万2千年前に農耕牧畜という食料生産が始まって集団の規模が急速に拡大しても、脳容量は大きくなっていないので、私たちの脳が記憶できる仲間の数は増えていないのではないかと思われます。

この150人規模の仲間を社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）と呼びます。何か悩み事があったり、トラブルに巻き込まれたりしたときに、疑わずに相談できる間柄の仲間を指します。これは、過去に喜怒哀楽を共にしたり、音楽やスポーツなど身体や心を共鳴させたりして付き合った仲間のことで、単に言葉でつながれているだけの関係ではありません。そして、この規模は身体や心の共鳴が不可欠なため、150人を超えて拡大しないのです。

現代の社会では、これまで人をつなぎ合わせてきた3つの縁（血縁、地縁、社縁）が薄れたために、この社会関係資本がつくりにくくなっています。それに代わって登場したのが、個人がばらばらに制度やシステムに頼る「契約社会」です。カードやアプリによってシステムにつながり、さまざまなサービスを享受する。しかし、その先には人間ではなく、情報によって管理される契約しかありません。システムが破綻したり契約が壊れたりすれば、すべてがなくなる。でも、人間の信頼によるネットワークならば持続的につなぐことができます。

これからの社会には、人々が身体や心を共鳴させてつながる仕組み、すなわち「社交」が必要です。情報に過度に依存することなく、集まって語り、楽しむ場所と機会をたくさん設けることが、安全と健康に不可欠なのだと思います。